

手綱圖式

卷之二

文庫圖式を伊勢國守貞常の通常が自序
子紀ノトモトノアガラ凡手綱の際やうと紀やうもの
手綱脇草深根と紀伊勢貞助紀述追加圖書本經大
冊子馬見を入紀上質抄大綱尚氏紀子馬圖書等と
あぬへ何とされとむとくせ間大筋に其室を紀
さるふまは圖式を正しを柳葉の術を織等因
列の取うち綱追そくまのく様等と内緒は是ふ
習ふく今抄り深いふかちと書き書とあるふも
昔あくとく教不すかとせんまくじば草
教色あぬをうく徴寫の字多とう徴ひく
栗原の伝元淨字一様あらびかととくとふ
てえをとくとくとやあらえととくとくとふ
すりすきへがひ角よとふあくしたく色の草
内ねり一巻の首もと教とくとくとくとくと
秋のものとくとくとくとくとくとくとくとくとく

御所様御馬手綱

幅一本

貞件調進

引子尺三寸

入子尺二寸

小口子寸一寸

大口子寸一寸

4110122

紫綾深

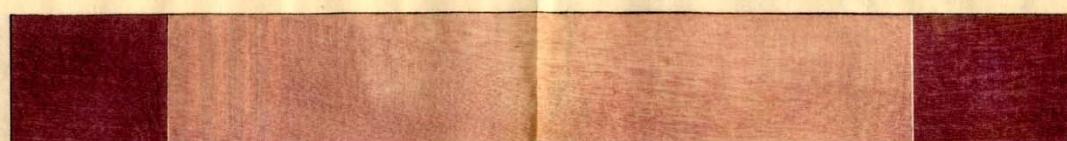
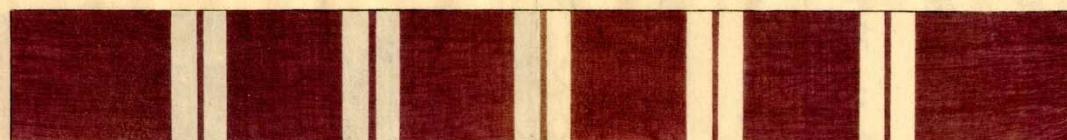
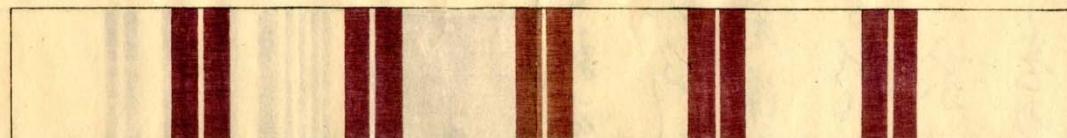
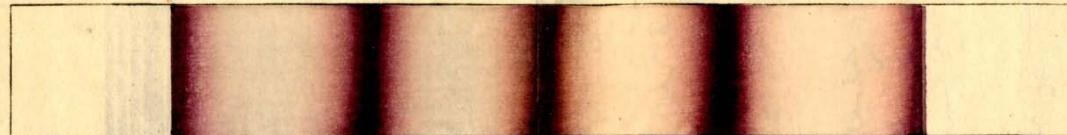
宗尊親王

御手綱也

引兩深

寺持院教將軍拜賀之時照祥調進之

ト申傳也



山川之水

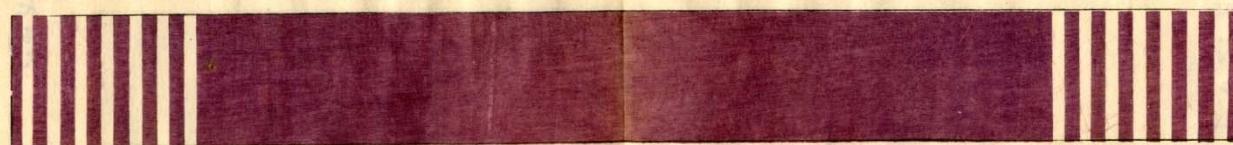
水口之水

水口之水

水口之水

麻花院教脚時因列調進

一束



貞誠のまが室

近三助、貞長のそぞられたるも

細川武列若領
よし



大正御年譜

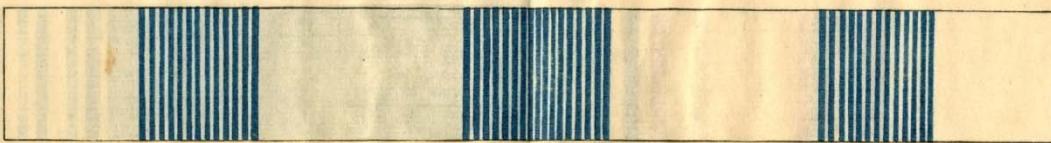
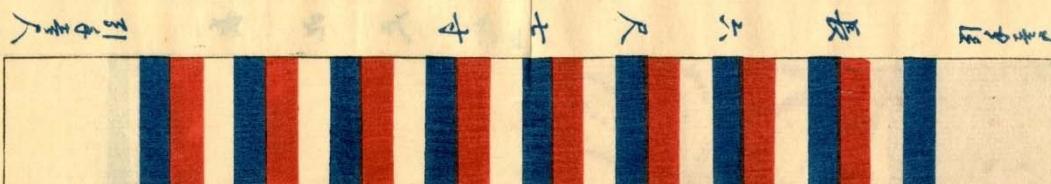
寛永三年正月 日

常安紀之

八人ふくわれんふくわ重の好ひるい

大進物手綱

布一式



富士御供え花被用久

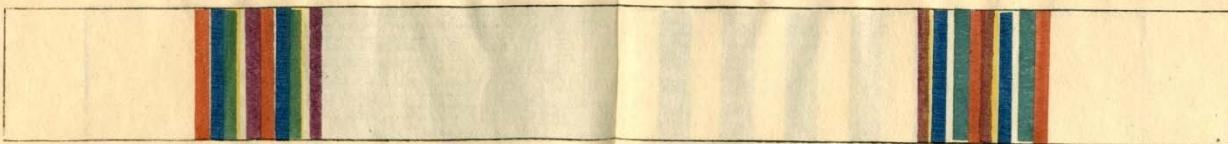
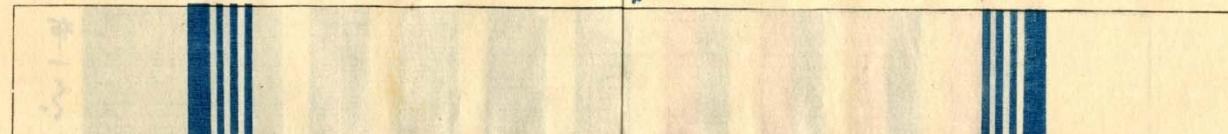
石橋教師所贈 貞仲禪進

本多入

阿の心事

甲子年

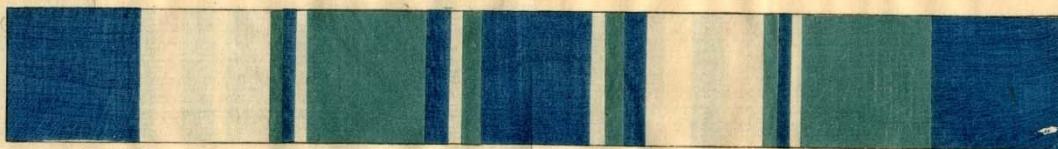
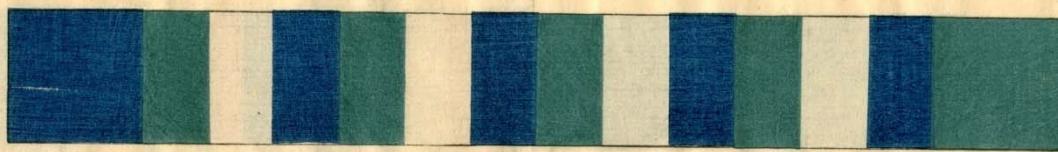
ヒヤウセンチ綱遠所往來く成る



軍陣手綱

布一三

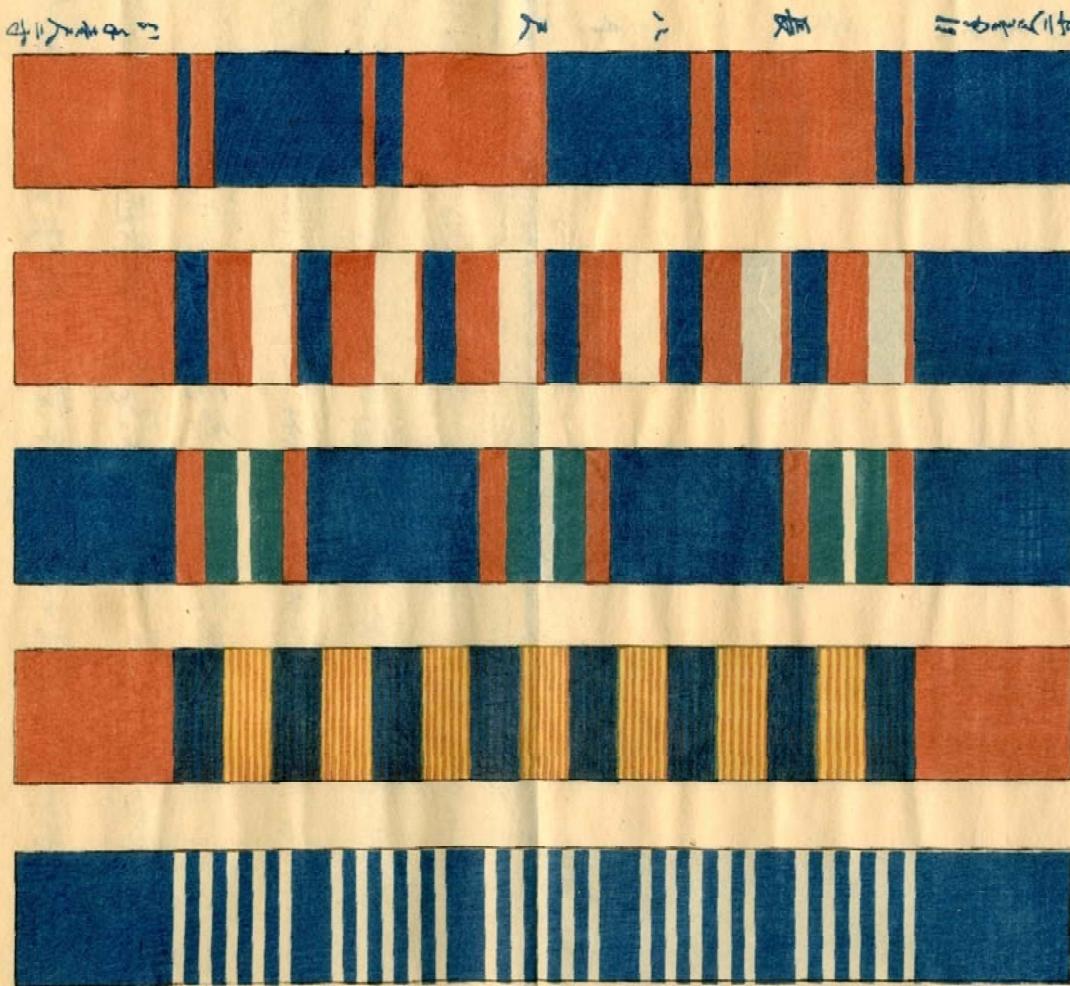
軍陣手綱



常山用弓手綱

貞宗朝臣の好

とう深照禅
寸法



さよと佐助
千綱貞親
朝臣の好

京郊の軍衣時代、綱腹章の腰襷が然家に送りて置かれて
此圖式を伊勢因幡守と名づけ、御所の御手綱を以て諸人の不
厚うさぎを調へ極手わざ作。伊勢氏兩流あり、御所の祿禮式
と同式を伊勢守と稱。綱の親姫も綱腹章以下馬装本の具足
を掌りて國守とし、即ち平道孫入道の門人伊勢伊勢守と金
照院の子孫す。靈陽院將軍の時、志因幡守ハ即くの常安入道
ねり、常安入道、彦子か一女を貞重とし、貞重死をまことに候
也。相傳の文書頗る教化し給えど、ものも多かりしとや
あふ信充故あく貞重の玄孫貞城の徒弟正薰より其家墨盒

の祕訣を相傳へ。以降、門禁アラシ庵へ、彼の書を集め考
校、行へ御の親姫の大體を知り、縦一尺、幅十卷、名付く「綱腹
新書」といふ。馬装本の書を校正せんと、やはり此圖式を残
し、手書きにて、傳摹され、また、色紙、表紙、裏紙等、
たゞ、しとぞ、天保六年秋七月栗原信充

京都　正花堂



